

学位請求論文審査報告書

氏 名 GENGZANG QIEZHU (更藏切主)
論文題目 『菩提道次第大論』におけるカダム派思想の研究—道次第を中心として—
審査委員 主査 大谷大学教授 福 田 洋 一
副査 大谷大学教授 箕 浦 暁 雄
博士 (文学) [大谷大学]
副査 駒澤大学准教授 加 納 和 雄
Ph. D. [ハンブルク大学]

I. 論文内容の要旨

本論文は『菩提道次第大論』に見られるカダム派諸師の影響及び、ツォンカパによる道次第思想の成立過程を検討するものである。本論文の章構成は以下の通りである。

序論

第一章 アティシャの「三士の道次第」伝統の系統

第二章 ツォンカパが継承した「三士の道次第」の系統

第三章 『菩提道次第大論』に見られるアティシャの影響

第四章 『菩提道次第大論』と『教説次第大論』の関連性

第五章 ツォンカパの道次第思想の形成過程

結論

第一章では、歴史の観点からカダム派における『菩提道灯論』と「三士の道次第」の伝統の位置づけを論じた上で、『菩提道灯論』と「三士の道次第」の関係を指摘し、カダム派に広まった「三士の道次第」の系譜を整理した。まず、『菩提道灯論』について、ナルタン寺のチム・ナムカタクパによるアティシャの伝記と『菩提道次第大論』におけるツォンカパの解釈を検討することによって、『菩提道灯論』は、波羅蜜乗と金剛乗を含む大乘全ての教えを体系的に確立したものであることを論じた。次に、「三士の道次第」の伝統について、『カダム明灯史』において記されるカダム法の分類に基づき、「三士の道次第」は『菩提道灯論』と区別されていることを指摘した。

第二章では、第一章で整理した「三士の道次第」の系統のうち、ツォンカパが継承した系統とそれらを聴聞した時期を、ツォンカパの伝記と聴聞録、『菩提道次第大論』のコロフォンなどの諸資料における記述を分析することによって明らかにした。

第三章では、『菩提道次第大論』に見る『菩提道灯論』及び、アティシャの影響について考察した。第一章で述べた『菩提道灯論』の位置付けを念頭におき、ツォンカパは『菩提道灯論』のどの点を重視し、それを自己の道次第でどのように解釈し、どのような役割を担わせていたのかを、『菩提道次第大論』における『菩提道灯論』の解釈と、『菩提道次第大論』における『菩提道灯論』からの引用を検討することによって明らかにした。

第四章では、『菩提道次第大論』の素材とも言えるドルンパの『教説次第大論』が、ツォンカパの『菩提道次第大論』の成立にどのような影響を与えているかを検討した。ツォンカパの伝記によれば、ツォンカパは『教説次第大論』を大乘者たちの伝統を受け継ぐものであると認識し、また『教説次第大論』における修道は、ツォンカパ自身が考えていた修道の次第と一致すると考えていた。本章ではまた、道次第と教説次第の意味の違いについて考察した。道次第と教説次第の文献は、ツォンカパ以降のカダム派の史書では様々な解釈が報告されているが、少なくともツォンカパの時代までは、ほぼ同じものと考えられていたことを指摘した。次に、ツォンカパの『教説次第大論』に対する評価と、『菩提道次第大論』と『教説次第大論』における修行道の次第を検討することによって、『教説次第大論』と『菩提道次第大論』の共通点と相違点を明らかにした。

第五章は、ツォンカパの道次第思想の形成過程について分析した。ツォンカパの道次第思想として、『菩提道次第大論』が成立する以前の『道の三種の根本要因』は、道次第思想の1つの転換点にあると言える。本小品はツォンカパ41歳の時に執筆され、出離の心と菩提心と正しい見解は修道の重要な三点であることが説かれている。これに対し、『菩提道次第大論』では、仏教者を小士、中士、大士という三つの段階に分け、仏陀の境地に向かう修行道の諸段階として位置付けることによって道次第を説明している。本章では、この二書の間、ツォンカパの道次第思想がどのように変化し、『菩提道次第大論』が著作されることに至ったのか、また『道の三種の根本要因』の思想が何に由来するのかという二点に着目し、ツォンカパの伝記とツォンカパが自分の師匠に送った書簡、『道の三種の根本要因』などツォンカパと同時代の資料をできる限り集め、ツォンカパの道次第思想の形成過程を考察した。

以上の五章を通じて、本論ではツォンカパの道次第思想には、カダム派の伝統が色濃く反映していると同時に、聖文殊からの教誡に基づく三種の道の要因の思想も組み込まれていることが分かった。この後者がカダム派の伝統とは異なるツォンカパの独自の思想と目される。それは、道次第が、三士それぞれの修行階梯を記述したものではなく、全て菩提心を起こした菩薩が修道すべき階梯であるという道次第の解釈に見られる。

II. 論文審査結果の要旨

従来のツォンカパ研究は、その中観思想の研究を中心に進められてきた。その点については、まだ残された問題が多々あるとしても、その全体像については大分明らかになってきた。しかし、中観思想はツォンカパの仏教全体の体系的理解を示す道次第の最後の一部分をなすものにすぎず、仏説の全てを包含し、衆生が仏になる道を示す道次第こそがツォンカパの仏教理解の中心をなすべきものである。ツォンカパ最初の主著である『菩提道次第大論』は、彼の道次第思想を詳細に展開したものであり、その後のチベット仏教の教えを決定づける転回点となった著作と考えられている。しかし、ツォンカパの道次第思想がどのように形成され、どの程度、どのような伝統に由来するものであるのか、さらにはそれまでにないツォンカパの道次第思想の独自性とは何か、という点は従来の研究ではほとんど問題にされたことはなかった。

本論文は、以上に述べた従来の研究のおよんでいない諸問題について、チベット人であることの利点を活かして多くの文献を参照して、様々な問題を解決ないし提起した優れた業績であると言える。

著者によれば、ツォンカパの道次第思想の形成には、チベット仏教後伝期の出発点となるアティシヤの『菩提道灯論』、その孫弟子にあたるドルンパの『教説次第大論』、アティシヤの弟子から始まるカダム派の道次第の教えの伝承、ツォンカパが聖文殊から授けられた教え、師匠レンダワとの議論という五つの要素が影響を与えている。著者はこれらを、伝記資料、各著作のコロフォン、カダム派史、書簡類などを細かく検討して、ツォンカパの道次第の思想がどのように形成されていったかを跡づけている。

このうち、『菩提道灯論』と『教説次第大論』に関しては、ツォンカパの『菩提道次第大論』のどの部分に影響があったか、そして相違点は何かということも明らかにしている。また、そのカダム派の伝統とは異なった聖文殊の教えを、ツォンカパが師匠レンダワに宛てて聖文殊の教えを報告している書簡から再構成し、それとツォンカパの有名な著作『道の三種の根本要因』が近い関係にあること、そしてそれがカダム派の道次第と本質的に同じものだと理解したことによって、ツォンカパが自らの道次第思想を確立し、『菩提道次第大論』の執筆に踏み切ったことを、聖文殊の啓示をツォンカパに伝えた師匠ラマ・ウマパへの書簡から見つけ出している。

本論文の分析は、これまで誰も着目してこなかったツォンカパの思想形成史を極めて正確に描きだしている。その点で画期的な研究と言える。

しかし、細かい点、特に文献学的な正確さ、厳密性を問題にすると、まだ荒削りな側面がことが審査会で指摘された。特に引用文については、それぞれ一つの版しか参照していないため、他の

版との異同などの注記がない。他の版があるときには、主要なものは参照して注記を書くべきであろう。また過去の研究に見られない視点からの研究であるとはいえ、個々の事実には従来の研究を参照すべきところもあり、それらへの言及がないことも惜しまれる。

また、アティシャに至るまでの、インド仏教における道次第の形成史についても何らかの言及が必要であった。もちろん、本論文はそれをテーマとしているわけではないが、アティシャの『菩提道灯論』の著作意図などを問題とするのであれば、そこにアティシャの独自性よりは、インド仏教からチベット仏教への連続性を見て取ることも可能であろう。

著作の比較といっても、未だ科段の比較や引用文献の調査などに留まり、文献自体の読解から導き出される比較ではない点も指摘された。

これらについては、今後著者が取り組んでいくべき次の課題と捉えることができ、それは本論文における歴史的な事実の積み重ねから描かれたツォンカパの道次第思想の形成史を、テキストの内容から裏付けていく作業と行うことができるだろうし、本論文はそのための序論の役割を果たすものとして十分な価値を有するという点については、審査員全員の一致する評価である。

審査に必要とされる最終試験については、審査委員全員により 2019 年 12 月 24 日に試問を行った。その結果、審査委員一同一致して、GENGZANG QIEZHU に大谷大学博士（文学）の学位を授与することが適当と判断した。